

レモンヘッズ/クリエイター LEMONHEADS/CREATOR

1. ベリング・グラウンド
BURYING GROUND
2. サンデイ
SUNDAY
3. クラング・バン・クラング
CLANG BANG CLANG
4. アウト
OUT
5. ユア・ホーム・イズ・ホエア・ユア・ハッピー
YOUR HOME IS WHERE YOU HAPPY
6. フォーリング
FALLING
7. ダイ・ライト・ナウ
DIE RIGHT NOW
8. 2ウィークス・イン・アナザー・タウン
TWO WEEKS IN ANOTHER TOWN
9. プラスター・キャスター
PLASTER CASTER
10. カム・トゥ・ザ・ウィンドウ
COME TO THE WINDOW
11. テイク・ハー・ダウン
TAKE HER DOWN
12. ポストカード
POSTCARD
13. リヴ・ウィズアウト
LIVE WITOUT
14. ルカ:ライヴ1989
LUKA (LIVE ON VPRO, 1989)
15. インタヴェュー
INTERVIEW WITH LEMONHEADS (HOLLAND, 1989)
16. マロー・カップ:ライヴ1989
MALLO CUP (LIVE ON VPRO, 1989)

レモンヘッズ WERE

イヴァン・ダンド
EVAN DANDO: GUITAR/VOICALS
ジェシ・ペレツ
JESSE PERETS: BASS
ジョン・ストローム
JOHN STROHM: DRUMS
ベン・デリー
BEN DELLY: GUITAR/VOICALS

イヴァン・ダンドは一体いつの間に曲を書き、一体いつの間にレコーディングをこなしていたんだろう？ 届いたばかりのレモンヘッズのニュー・アルバム「カモン・フィール」に何度となく耳を傾けながら、僕はそんな想いを巡らすにはいられなくなりました。

バンドにとってのターニング・ポイントになった前作「イツ・ア・シェイム・アバウト・レイ」のリリースから、まだたったの1年。そのわずかな期間の間にも、去年の暮れには総て新録音による「ミセス・ロビンソン」のEPを出したり、精力的なツアー活動を行ったりしていた。特に、イギリスではそれこそ毎月のように足を伸ばしていたような印象がある。今年2月の来日公演の時に取材にイヴァンに会った時も、「カモン・フィール」というタイトルは決まってるんだけど、制作に入るのはいくらも、彼は話していた。ジュリアナ・ハットフィールドの最新作『ピカム・ホット・ユア・ア』と同様、ロサンゼルスでのレコーディングという話だが、一体いつどこにそんな時間があつたんだろうか。しかも、その新作「カモン・フィール」の内容が、今年リリースされたアメリカのロック・アルバムの中でもピカイチの仕上がりを聴かずものになっているから、僕なんかは余計に驚かされてしまっているわけなのだ。

今振り返ってみるまでもなく、去年リリースされた「イツ・ア・シェイム・アバウト・レイ」は、イヴァン・ダンドという今までになかったタイプのポップ・スターの登場を鮮烈に告げるアルバムだった。フレンドリーなところをたっぷり兼ねながらもシャキッととしたダイナミズムを生み出すギター・サウンドと、ポップかつ芯の強さを感じさせる歌。そうした美点はもちろんのこと、「イツ・ア・シェイム・アバウト・レイ」でのレモンヘッズがそれまでの彼等と違ったのは、イヴァン・ダンドという妙な男のキャラクターがよりはっきりと打ち出されたところにあると思う。もちろん、バンドとして充実してきたからイヴァンの個性が際立ってきたか、あるいは、イヴァンのキャラクターが目立ってきたかバンドとして充実してきたか、その辺の区別は微妙なところだ。おそらく、その両方が混ざり合ってるんだろう。けれど、レモンヘッズといえばイヴァンのあの顔がバツと浮かんでくるようになった、っていうのはとても重要なことだと思える。

近年のいわゆるオルタナティブ系のアメリカン・ロックの顔役といえば、ニルヴァーナのカート・コバーンや、ダйнаソーJr.のJ・マスシス、またはソニック・ユースのサーストン・ムーアやシュガー・ボブ・モールドといったところが思い浮かぶ。けれど、イヴァン・ダンドには、彼等のようなアンダーグラウンドっぽい面持ちはまるで感じられない。アメリカのアンダーグラウンドなシーンから現れてきた人には間違いないのだが、ルックスは見た通りのやさおトコ風だし、ビデオ・クリップ等で見られる振る舞いもユーモアたっぷり、まるで威厳なんてものを感じさせない。それでいて、やたらとインパクトのある存在感を見せてくれるんだから、ホントに不思議なんだ。

言い換えてみれば、イヴァン・ダンドは自らに降りかかる抑圧をそのまま表現するタイプの奴ではないんだろ。イヴァンが歌うのは、その抑圧を受け止めた上での開放、だ。そんなところが感じられるからこそ、近年のレモンヘッズに僕はこんなにも共感を感じるんだろう。そして、イヴァンのような個性を持つアオトジェニックなポップ・スターは、近年のアメリカにはちょっと見当たらなかった。強いと言えば、同じくボストン出身のジョン・リッチマンの資質を受け継いだ90年代型のアーティストとは言えるかも知れないが、ジョン・リッチマンがこんなに音楽誌の表紙を飾ったことなんてないはず。そう、

イヴァン・ダンドは今最も音楽誌の表紙が似合う奴だとも思うのだ。

こうした「イツ・ア・シェイム・アバウト・レイ」での大成ぶりには、新作の「カモン・フィール・ザ・レモンヘッズ」にも見事に引き継がれている。前作からのインターバルが短かいのにもかかわらず、曲は粒揃いで、前作以降のツアーから固まったラインナップ（イヴァン・ダンド、デヴィッド・ライアン、ニック・ダルトン）のまとまりも最高。「イツ・ア・シェイム・アバウト・レイ」から「カモン・フィール」に至るバンドの躍進ぶりは、「ドキュメント」から「グリーン」、「アウト・オブ・タイム」とメジャー・ブレイクを果たした頃のR.E.M.にも匹敵する。来日時に取材記事を書かせてもらった『ミュージック・マガジン』'93年4月号で、レモンヘッズについて僕は「今アメリカで最も伸び盛りなギター・バンドといってもいいくらいの充実期を迎えている」と評したが、彼等はまさに今アメリカで最も勢いに個性を伸ばすバンドになってきたのではないだろうか。まったく、あのやる気があるんだか知らんか判らない男のどこに、こんなパワーが潜んでいたんだろう。

そうしたバンドの飛躍と、人気の高まりに対して絶好のタイミングで日本発売されるのが、今まで日本で紹介されていなかったこのセカンド・アルバム「クリエイター」というわけだ。

僕がレモンヘッズと出会ったのは、スザンヌ・ヴェガの「ルカ」のカヴァーが入ったサード・アルバム「リック」からだ。だから、この「クリエイター」はリアル・タイムで聴いていたわけではない。本作と同時にやはり初めて日本発売されるデビュー・アルバム「ヘイト・ユア・フレンズ」と、この「クリエイター」を買い込んだのは、「イツ・ア・シェイム・アバウト・レイ」を聴いた後の話だ。以下は、そうした立場で話を進めていくことにしたい。

「イツ・ア・シェイム・アバウト・レイ」でレモンヘッズの顔になった僕にして見れば、'88年に地元ボストンのインディ・レーベルTAANGIからリリースされたこの「クリエイター」というアルバムは、正直に言って彼等の近作ほどのもり込んで聴けるアルバムじゃあない。曲の出来も演奏もまだまだ、何よりイヴァン・ダンドの個性がまだ目覚めてない。一枚のコインの表裏のような「ヘイト・ユア・フレンズ」と「クリエイター」は、レモンヘッズにとって、またイヴァン・ダンドにとっての習作的な時期だった。そんな風に解釈していいと言ってもいい。

それもそのはずで、デビュー時のイヴァン・ダンドはまだ学生。バンドの方も学校の友人達を集めて組んだ、半分アマチュアのようなものだった。だから、このアルバムでのレモンヘッズも、ハスカー・デュー等の流れを汲む荒々しいガレージ・サウンドをそのまま放り出している。この時点でのメンバーのラインナップは、イヴァン・ダンド（ギター、ヴォーカル）に加えて、ベン（ベンジャミン）・デリー（ギター、ヴォーカル）、ジェシ・ペレツ（ベース）、ジョン・ストローム（ドラムス）の4人。ジェシ・ペレツは現在、写真や映像の道に進み、近年のレモンヘッズのビデオ・クリップ等も手掛けている人。ジョン・ストロームは当時ジュリアナ・ハットフィールドが在籍していたブレイク・ベイブーズのギタリストであり、現在はそのブレイク・ベイブーズから派生したアンテナのフロント・マンを務める人物だ。

この4人のラインナップでパンキッシュな演奏が繰り広げられる本作だけれども、近年のレモンヘッズとはだいぶ趣が異なるとはいえ、この「クリエイター」に注意深く耳を傾けてみると幾つとも興味深いことに気付かされてもく。

まずその1つは、イヴァン・ダンドが書いた曲と、ベン・デリーが書いた曲とで、ふたりのヴォーカル・スタイルに明らかな違いが見受けられることだろう。当時のレモンヘッズはこのふたりの双頭バンドだったらしく、どうやら曲を書いた方がヴォーカルをとるという形態をとっているようだが、イヴァンの歌声がまだ近年の彼のヴォーカルに近いスタイルなのに対し、ベンのそれはモロにバンク。メジャー・デビューを前にベンがバンドを去っていったのにも納得がいく。

また、「ユア・ホーム・イズ・ホエア・ユア・ハッピー」でのイヴァンの弾き語りには近年のレモンヘッズに磨かされていくものを感じるし、キッスの「プラスター・キャスター」をカヴァーしているのも、ブラック・サバスが好きというイヴァンのハード・ロック趣味が窺えてくる。まあ、この人の場合、ブラック・サバスとグラム・パーソンズとマーヴィン・ゲイを一遍に好きだと言っちゃうところが面白いわけでもあるんだけど。

それに、「ソニック・ユースのギター」の使い方は凄いともし、僕もユニークなノイズを作ってみたい、と言っていた言葉を思い出させてくれるようなところがあれば、この時点でそれが生かされているのかどうかは判らないが、「J・マスシスにはギターのエフェクト類やアンプの使い方をいろいろと教えてもらった」と言っていたのを思い出さ箇所もある。「ダイ・ライト・ナウ」は初来日公演でも演奏されたナンバーだし、どこかイヴァンの学生時代の卒業写真でも見せてもらっているような気分させてくれるアルバムなのだ。

そして、このCDにはベン・デリー脱退後の、おそらくドイトスのラジオ用に収録されたと思われるライブが3トラック（正確には2曲とインタビュー）ボーナスとして収められている。このボーナス・トラックを聴いても、本編の「クリエイター」からバンドが変化していったの模様は一目瞭然。2曲ともサード・アルバム「リック」からのナンバーといえることもあり、この「クリエイター」までを第1期レモンヘッズと見なすことは可能だろう。

'88年に本作を発表したレモンヘッズは、この後次第にイヴァン・ダンドのワン・マン・バンド的な色合いが強くなり、翌'89年にはサード・アルバム「リック」を、続いて'90年にはアトランティックと契約してメジャー・デビュー作「Lovey」をリリース。次いでイヴァンのオーストリア訪問が、スマック・ザ・トム・モーガンや、ゴッドスターのニック・ダルトンといった、ハーフ・ア・カウ・レーベルの人達との出会いをもたらしたら、その交流から「イツ・ア・シェイム・アバウト・レイ」や「カモン・フィール・ザ・レモンヘッズ」といった傑作アルバムが産みおとされることになるわけだ。

先にも書いた通り、この「クリエイター」でのレモンヘッズと近年のレモンヘッズの間にはちょっとした隔りがある。しかし、最近のレモンヘッズが好きという人にとっても、このアルバムはやはり一度は耳にしておきたい作品であることに間違いはない。なぜなら、ここには若きイヴァン・ダンドの出発点が見えられているし、イヴァンの成長はこの礎にして語られるべきものだろうと思うからだ。今「カモン・フィール・ザ・レモンヘッズ」の地点に立ったイヴァン・ダンドは、これから僕達とどんな新しい風景を見せてくれるのだろうか。彼の未来に大きなエネルギーを贈りながら、今日はこの辺でペンを置くことにしよう。

Burying Ground

(for e. dickinson)
Down the road, round the hill
Past the dust and railroad tracks
Where the dark woods whisper
She is gone

Where the water runs unseen
Faded leaves are rustling
The deadfall snapping
She is gone

A carpet of pine needles
Spreads to the burying ground
Petals scatter, seasons change

She is dust, she is no more
Only the ground remembers
She is dust
She is no more

This is the Hour of Lead
Remembered, if outlived,
As Freezing persons, recollect the Snow -
First - Chill - then Stupor - then the letting go -

*Last verse (spelling, capitalization, punctuation and all) by
E. Dickinson from Thomas H. Johnson, ed., the complete
poems of Emily Dickinson, p. 162
c. 1862 and used without permission, dude.*

Sunday

Down down to the beach
One lesson left to teach
There where the water flies let me lay down and die
On the sand
The moment's at hand

On a winter sunday
Had to happen someday
I see the days go by
I feel the minutes fly
I feel the time slipping away

I never saw the ice and snow
Whispering as you turned to go
Under snow you lay turning to go can't stay
Don't take my hand
Don't understand

On a winter sunday
Had to happen someday
under snow you lay
Turning to go can't stay
Don't take my hand don't understand

Clang Bang Clang

You left off where I got on
Now temptation is weak and my patience is strong
Used to be that I was unkind
Now I don't call and you don't mind
Thought I was wrong, wrong is what you said
Now you're right and I'm left for dead
Thought it was dumb, dumb what I heard
Now I'm meaning every word.

Clang bang clang went the ringer at the door
They put me in a coil with a concrete floor
Wrapped a phone cord around my wrist
Now I hurt my wrist and talked while I kissed
Thought it was wrong, wrong, wrong what you said
Well now you're right and I'm left for dead
Thought it was dumb, dumb what I heard
Now I'm believing every word.

Clang bang clang...

Out

Digging deeper in the sand
Now the water comes up
Cut my finger on it
It's so, it's so
What can you do?
I'll remember you.
He waits for you behind

It's so, it's so
Let it go.

Digging deeper in the sand
Now the water comes up
Cut my finger on it
It's so, it's so
What can you do?
I'll remember you.
He waits for you behind
It's so, it's so
So he turns you down
And you start flipping out
And he's gone out.

Your Home Is Where You're Happy**Falling**

(from a dream)
Saw you in the subway twisting and falling
Train echoes in the stale air of a tunnel, falling

Spinning in circles we lose all direction
And fall where no arms can come rushing to catch us

Saw you on the fourteenth floor twisting and falling
Scream bounces in the bright sun of a canyon, fading

Hang on
Don't wake up

Die Right Now

Feels so good to feel him whispering his wishes inside you
Play along, there is no wrong, you've got to let him guide you
You're the first sweet little girl to have this love of mine
Forever will be until the end of time.
Time.
Wake up baby to the fact that the upper souls aren't clever
Change your mind, give me your life, and you will live forever
Play along, there is no wrong, you've got to let him guide you
Feels so good to feel him whispering his wishes inside you
inside you.

I've got to protect it, I've got to keep it in my soul
I've got to protect it, I must believe it is my core
I've got to protect it, Got to keep it in my soul
I've got to protect it, I must believe it is my toll.

Two Weeks In Another Town (Ben Dally)

(for richard dally)
All the houses look the same to me
Dogs bark in the driveways
There's the garden I've seen before
Bright porch, dark doorway

Two weeks in another town
Wake me up when it's over again
Night turns into morning
A walk in the spring rain

Climbing up to the attic
Smell the dust and the sunshine again
You just said a mouthful
You can't take it with you, y'know

Plaster Caster

My baby's getting anxious the hour's getting late
The night is almost over she can't wait
Things are complicating my love is in her hands
And there's no more waiting she understands

*The plaster's gettin harder
My love is.....
Who's talking of my love for her collection (collection)

Plaster caster
Grab a hold of me faster
If you wanna see my love just ask her
My love is the plaster
Yes she's the collector
She wants me all the time to inject her

**Plaster Caster (Plaster caster)

Grab a hold of me faster (faster faster)
If you wanna see my love just ask her (ask her)

*Repeat
**Repeat

Plaster Caster (plaster paster) caster
She wants my love to last her
She calls me by the name of master

**Repeat

Come To The Window

(for L.d.)
Morning fields moving slow
Cold bright river always flow
Churchbell all the way from town
Sun will tell you if you listen

Hold on to yourself for awhile
Love the world enough to smile
Friends will come and friends will go, but I'll always be here

Grown up fast eyes of a child
Shine like a candle all the While
Ask the sky what it's trying to say
Don't mind the rest they won't hear anyway

Hold me in your heart awhile
Love the world enough to smile
Friends will come and friends will go, but I'll always be here

And when the trees bare on the sky
I won't have to tell you not to cry
Seasons come and seasons go, but I'll always be here

Take Her Down

Water falls to hold me up
Center of the sea
Someway that you'll never be
I wanna change but I don't know how
How can you let him touch you now?

Darkness folds to draw me out
Bottom of the sky
Drowning eyes they turn to die
Collector knows forever lie
Acid in your throat don't cry

Fire on the ocean go
Sun is sinking far below
Glowing cold but always gone
Numb and flashing off and on
Dying in your heart

Grab ahold and don't say when
Shattered on the floor
Trying not to lose it all
Your eyes like an iron Wall
Waiting for the axe to fall

Postcard

Once I thought I was more right than wrong
Fading myself in the corner
What I bought and why it takes so long
Something inside of her warned her

*I know that it doesn't matter much
But I hope we keep in touch
I know that we won't go on as such
But I hope we keep in touch
Could it be that hard
Send you a postcard

Fragile smile or ragged sleeve
Didn't laugh once too often
For a while it takes to breathe
Try to read here what I've done

*Repeat

You laugh across the kitchen
And something in our magazine
I frown across the table
Saw blood I've never seen
Your hair falls in your eyes as you ask

What do you need
See yourself never satisfied
In the clothes that you try now
I swear myself, I say I never cry
Was to saying good bye now

*Repeat

Live Without

(for juliana, 1987)
Kill the longing though I know I'm lying to myself
It's an eccentric gift
Gathering dust on the shelf

Still feverish
Day one dies wish
New stars old sky
Lies satisfy

How can you live without losing anything?
What do you give the girl who has everything?

While the months go by and I can almost touch you
I pull back from your hand
Because I want too much to

Hat full of rain
Clean and profane
Though impolite
Can this be right?

I can't can't stop you
Do what you want to
What's left left over?
Some song you wrote her

Luka (live on VPRO, 1989)

*My name is luka
I live on the second floor

I live upstairs from you
Yes I think you've seen me before

If you hear something late at night
Some kind of trouble, some kind of fight
Some kind of fight
Just don't ask me what it was

Maybe it's because I'm clumsy
I try not talk too loud
Maybe it's because I'm crazy
I try not to act too proud

** (They) only hit until you cry
After that you don't ask why
(You) don't ask why...
(You) just don't argue anymore

*Repeat
**Repeat three times

Interview**Mallo Cup**

Here I am outside your house at 3 am
Trying to think you out of bed
I whistle at your sill
It echos across the street instead.

I never will forget
I ain't remembered yet
Like makerel in a net
I forget to forget.

You saw nothing in my eyes but yourself
Nothing in my eyes
I can't seem to find the same no one else
I guess that's no surprise.

I never can forget
I ain't remembered yet
Like makerel in a net
I forget to forget
I ain't remembered yet.

ベリング・グラウンド
道を踏み、丘を回って
わさわさと囁く陰湿な森の基地から
線路を走り
彼女は行っちゃった

人知れず流れる川
カサカサ舞う枯葉
みしみし鳴る森の雨れ木
彼女はもういない

基地へと続く
敷き詰められた松葉の絨毯
花びらは散らばり季節が変わる

彼女は土に帰った、もういないんだ
この土地だけが覚えてる
彼女はちりとなって
消えてしまった

アワー・オブ・リードから引用
もし兵生きたなら思い出されるさ
凍りついた人々が再び雪をかき集めて
始めに一寒気がして一感覚が無くなりなすがまま

[注] 最後の節(綴り、大文字使用、句読点他全部)は
トーマス・H・ジョンソン編集 1862年度
エミリー・ディッキンソン著「ザ・コンプリート・
ボクス・オブ・エミリー・ディッキンソン」P.162
から無断引用したんだぜ。気取り屋さなよ

サンディ

浜辺へ行くこ
あと一つだけレッスンがあるんだ
海の水が舞い上がって僕は砂の上で
ころっと横になり死にまじう
瞬間、瞬間がその手の中

冬の日曜日

いつかそうなるべきだったんだ
日々過ぎて行く
一分一分飛んでいく
時がどんどん過ぎて行くのが俺には分かるんだ

氷も雪も一度も見たことなかった
積りて、おまえが背を向けて行ってしまった時
横たわってた雪の下から這い出て、ここにはいられない
俺の手をどらないでくれよ
分からないよ

冬の日曜日

いつかこうなるべきだったんだ
雪の下におまえは横たわる
でもここにはいられない
俺を巻き込まないでくれよ
分からないよ

クララ・バーン・クララ

俺がたどり着いた場所からおまえは去っていった
もう迷惑には負けないさ、俺は余裕強んだ
俺はいつも親切な感じじゃなかった
電話しなくても構わないよ
俺が間違っても、おまえこそおかしな
そうさ、おまえは正しいさ、俺はもう死ぬだけ
愛憎になるようなことを聞いてしまったけど
口から出る言葉みんな木気なんだぜ、俺は

ガチン、バーン、ガチン、ドアの鎖を壊らす
奴らは俺をコンクリートの狭路に閉じ込めた
俺の手首を電話コードでぐるぐる縛って
手首も傷ついてキスしながら話してんだ
おまえの言ってることは間違ってるけど
そうさ、おまえは正しい、俺はもう死ぬだけ
運命になるようなことを聞いてしまったけど
俺はどんな言葉もみんな信じてるんだ

ガチン、バーン、ガチン……

アウト

ほとんど深く砂を掘って
水が噴き出してきた
指を切っちゃったよ
そうか、そうなら
おまえはどうするんだい
俺はおまえを忘れないよ
後ろで奴がおまえを行ってる

そうさ、そうなんだ
好きにさせろよ

ほとんど深く砂を掘って
水が噴き出してきた
指を切っちゃったよ
そうさ、そうなんだ
おまえに何ができるんだい
俺はおまえを忘れないさ
後ろで奴が待ってるぜ
そうさ、そうなんだ
奴はおまえをがっかりさせる
おまえは気がヘンになり始めて
そこで奴はオサラバさ

ユア・ホーム・イズ・ホエア・ユア・ハッピー

フォーリング

無れながら倒れていくおまえを地下鉄で見たよ
線な匂いのトンネルの中、電車はこたましていた
輪の中をぐるぐる回って俺たちみんな方向を見失う
誰もとっさに変えていくおまえは14階で倒れてしまっんだ

無れながら倒れていくおまえを14階で見たよ
夜空の輝く太陽の中、絶叫は跳ね返り消えていく

そのまま
目を覚ますんじゃないぜ

ダイ・ライト・ナウ

奴の望みを耳もとで囁かれて最高の気分
選べよ、それでいいんだ、奴にリードしてもらうんだな
俺の愛を迷く女の子は君が初めてだよ
永遠にこの世の終わりで
終わりで

目を覚ませよ、ベイビー 上流の奴らは結構バカだぜ
考え直して、僕に全てを委ねて君は生き続けるんだ
選べよ、それでいいんだ、奴にリードしてもらうんだな
奴の望みを耳もとで囁かれておまえは最高の気分
最高の気分

俺が守ってやんなきゃ、自分の喉に刺さる
俺が守ってやんなきゃ、これが一番重要なことさ
俺が守ってやんなきゃ、自分の喉に刺さる
俺が守ってやんなきゃ、これが俺の代償なんだ

2ウィークス・イン・アナザー・タウン

どの家もみんな同じに見える
私有車道で犬が吠える
あの扉は前にも見たことあるな
めいり空閑、暗い声口

他の町で2週間
一日が終わればまた目覚める
夜がくれば朝がきて
霧の雨の中を散歩する

屋根裏に上って
埃の匂い、太陽がまた差し込む
おまえは正しいさ、俺はもう死ぬだけ
そりや持つてけなさいぜ、なあ

プラスター・キャスト
ほとんど遅くなってくるしあの娘は心配顔
もうすぐ夜が明ける 彼女は持ちきれない
ように複雑だけど俺の愛はあのコのものなんだ
これ以上待てないってわかってるのさ

石膏が硬くなってきた
彼女は俺のコレクター
俺もその一人だなんて、誰だよってんの

ギプスがぎゅううって
俺を掴んで離さない
俺がどんな愛し方をするか知りたかったら彼女に聞きな
石膏にあってあるから
そうさ、あのコはコレクターなんだ
いつでも俺にぶち込んで欲しいってさ

プラスター・キャスト (石膏ギプス)
ぎゅううって俺を掴んで (ぎゅうううって) *
どんな愛か見たかったら彼女に聞いてみな (彼女に)

*繰り返す
*繰り返す

プラスター・キャスト (石膏塗りつけ) ギプス
彼女は俺の愛がなきゃだめなま
そのものズバリ、二人様の名前で俺を呼ぶんだぜ

*繰り返す

カム・トゥ・ザ・ウィンドウ
朝の平原はゆっくり動く
赤た輝く川は絶えず流れ
遠い町から教会の鐘の音が聞こえる
耳を傾ければ太陽が教えてくれるよ

少しの間だけでも自分を大切に करना
笑顔がこぼれるほど世の中を愛して
去る友、来る友、でも俺はいつでもここにいるよ

子供の目のままあつというまに成長した
いつもうまくの突のように輝いて
空が何を言おうとしているのか聞いてごらん
他人のことなんか気にするなよ、どうせ聞かないんだ

しばらくおまえの心で俺を包んでくれるかい
笑顔がこぼれるほど世の中を愛して
去る友、来る友、でも俺はいつでもここにいるよ

泣くに向かってむき出しの木々
泣かないでなんて言わない
季節が回り移り変わっても、俺はいつでもここにいるよ

ティク・ハー・ダウン

俺を支えるように
海のと真ん中で水が降り注ぐ
こんな絶対わからないだろう
俺は愛りたいけどやり方がわからないんだ
今、どんな風に奴に体を触らせてるんだい

暗闇に飲み込まれて
空から俺を引きずり出す
濡れた両目は死んで
コレクターは永遠の夜を知っている
すばいものが喉にこみ上げても泣くなよ

漁火が灯り
遠かたなたに太陽が沈む
だんだん寒くなるけど
いつでも麻痺してついたり消えたり
おまえの心の中で死んでいく

ぎゅって掴んで、もういいなんて言うよな
床の上には散る
全てを失わないように
鉄の壁のようなおまえの目ば
まさかりが降り下ろされるのを待っている

ポストカード

俺は全然間違ってるんかいなんて思ってた
だんだん元気もなくなるよ
何を貰ったんだって、なんでこんなに時間がかかるの
彼女の中の何が警告する

そんなに入したことじゃないさ
でも友達でいいよ
今まで通りにいかないのはわかってるけど *
連絡は取り合おうよ
そんなに大変なことかい
喉はがきを送るよ

時々しい笑顔、ほろほろの指
前はしゅっゆうだったけど今はもう笑わない
息をするのもしゅっゆうと時間がかかる
俺がここに書いたことを読んでみてよ

*繰り返す

台所からおまえは笑ってる
確信に俺が寝てるんだい
テープ録りに俺は不機嫌
こんなにカッとしたことないさ
髪をほどいて おまえの髪が言う
どうして欲しいの
一度だって満足したことがないんだ
今おまえが着てる服だって
着ろよ、俺は絶対泣かさないって

今、さよならを言おうとしてるけど

*繰り返す

リヴ・ウィズアウト
自分を偽ってるのは分かるけど、俺れなんか知らない
風変わりな贈り物だ
期を満してさ

まだ熱っぽい
望みが消え失せる日
新しい星、ありふれた空
満足げに横たわる

何も失わないで生きていけるかい
全てを持ってって彼女に何をあげるんだ

月日が経つ中、もう少しでおまえに触れられたのに
俺はさっさと手をひいた
なせてもものすくそくそうしたかったからさ

帽子いっぱい雨
清潔だけど不淨

無作法だとしても
これでいいのかい

俺はおまえを止められない
やりたいようにしろよ
何が強たてていうんだ
彼女のために書いた歌だけさ

ルカ：ライヴ1989

俺はルカ
二階に住んでるんだ *
あんなの上に住んでるんだよ
ワ、前に会ったことあると思うよ

昨日の夜何か聞きたかい
なんかケンカしてるみたい
そう、ケンカみたいさ
なんだったかなくて聞かないでね

たぶん、僕ってぶっちゃけだから
大きな声で話さないようにするよ
たぶん、僕ってバカだから
自信満々な態度はとらないようにするよ

泣くまで殴られただけだよ
なせて聞かないで
聞かないで
もうロコたえなんかしないから

*繰り返す (3回)

インタビュー

マロー・カップ：ライヴ1989
午前3時、おまえの家の外に俺はいる
ベッドからおまえが出てこないかと思って思いながら
数回のことでも口喧しいたら
通りでエコーしちゃった

絶対忘れないぜ
俺は忘れられちゃってるけど
縋にかかった魚みたいに
忘れのために忘れたんだ

俺の目に写ってる自分の染しか見えないうおまえ
他にはなんにもないさ
同じような誰かを探せそうにないけど
別に驚いたことじゃないよな

忘れられないんだ
俺は忘れられちゃってさ
縋にひっかかった魚みたいに
忘れのために忘れたんだ
俺は思い出されさえないけど

訳：AKIYAMA SISTERS INC.